列車で行く

肌が焼けるような日差しの中、扇子をあおぎ暑さを凌ぎながら私たちは列車を待っていた。今日は野辺山で吟行をする。野辺山と言えば、JR駅の中で一番標高が高い駅だ。「向こうは涼しいと良いですね」そんなことを話していると、待ちに待った列車がやってきた。

参加者たちは乗り込むや否や、机に俳句歳時記や季寄せ、俳句手帳を広げ始めた。そして列車が出発すると、真剣な面持ちで景色を見ながら筆を滑らせる。参加者の方に「俳句を詠まないの？」と声を掛けられ、私は初めて詠むことに決めた。外は緑の世界。右へ左へと千曲川がゆるやかなカーブを描いている。いざ詠もうとすると、見たままのこの景色を「五七五」と限られた字数で表現できず、難しさに頭を悩ませていた。すると一時間半の列車の旅もあっさりと終わり、野辺山に着いてしまった。

ご一緒させて頂いた、俳句祭で皆勤賞を誇る男性はこう言っていた。「人との輪を俳句は作ってくれる。知らない人とも繋がれる」と。

俳句を詠み、恥ずかしながら句会の人に見て頂いた。単語や助詞ひとつでもニュアンスは変わり、考えた俳句を手直しする作業はとても楽しかった。

俳句にはその人の想い、人生が表れる。それを通して参加者たちはお互いを知り、仲を深めていく。いくつになっても楽しめる俳句。皆さんもこの輪に入りませんか？

最後に一句。

俳句の輪 夏の視線は 気にもせず

（田中）

大自然を一句に込めて

今年初めて設けられた、高峰高原の吟行ツアーに同行した。参加者を乗せたバスは、曲がりくねった山道をどんどん進む。バスを降りると、およそ二時間は各自散策しつつ俳句を詠む時間となる。標高二千メートルの高峰高原は、涼しく過ごしやすい。静かな高原には、鳥のさえずりや虫の鳴き声が響き、色とりどりの花が咲く。

市外から来たという二人組の女性の散策に同行した。神農初恵さん、中村恭子さんは、地元の俳句結社で知り合った先輩・後輩だと言う。夏には避暑地、冬にはゲレンデとなる高峰には、何度か訪れたことがあるようだ。植物や虫、鳥を見つけては、名前を教えてくださった。「何も知らないとただの植物だけれど、名前を知るだけでぐっと近づける」と中村さんは話す。私の名前とその漢字や由来を聞かれ、とてもいい名前ね、と褒めていただいた。「茉夏という名の少女」として俳句のネタにいただくわ」「上の句がひまわりのだと素敵じゃない」などと俳句を詠む目線での会話が面白かった。

五・七・五のリズムに乗せ、自然の美しさや心の動きを詠う。高峰の大自然の中で鳥の声を聴いていたら、「ここで一句」と詠いたくなる俳人の気持ちが少し、わかったような気がした。（中田）

ロマン小説　第十六話

すみれ

「これ以上は聞いちゃいけない、聞きたくない。」そう思った私は無言でリビングを飛び出し、自分の部屋に戻った。机の上には先ほど置いた走り書きのメモ、それを見た瞬間先ほどのリビングでのやり取りが思い出され、衝動的にメモを鞄の奥に乱暴に押しこんだ。母の話を途中で遮ったのは、縮んだように感じた彼との距離が遠くなる気がしたからなのか、頭が混乱してきて逃げるように布団にもぐった。

その翌日からは、受験生だからだろうか、それともあの日の出来事と彼への思いを忘れるためだろうか、私は朝から晩まで黙々と勉強に打ち込んだ。そんなある日のこと、あの日以来母に対して若干気まずさを感じていた私は、夕食を終えるとリビングをそそくさと後にしようとした。

その時母が口を開いた。「明日から二日間家を空けるから。」しばし無言の沈黙が流れた後に私はリビングを出た。あの日と同じ生ぬるい空気に耐えられず、ぶ厚い雲に覆われた空の中、家を飛び出した。

とにかく家にはいたくない、歩いていると突然雨が降ってきた。夏の土砂降り、慌てて近くのバス停へ駆け込んだ。「よりによってこんな日に、いや、こんな日だからこそか。」自嘲気味にそうつぶやきながら視線を前に移すと、人影がこちらに走ってくるのが見えた。土砂降りで視界が遮られる中、一瞬で感じた初めて出逢った日と同じ気持ち、まぎれもなく「彼」だった。

2012年
（平成24年）
7月28日
土曜日

こもろまん編集部
発行所：小諸市民会館
komoroman@vanotica.net

第十六号

『こもろまん』は、慶應義塾大学加藤文俊研究室が制作、発行しています。ご意見ご感想お待ちしてります。（メールアドレス　komoroman@vanotica.net）

「小諸を俳句のまちに」

今年で四回目をむかえた、「こもろ・日盛俳句祭」。一体この会にはどのような方が携わっているのであろうか。そして、この会の裏にはどんな想いが込められているのであろうか。

今回は、この日盛会を主催する方々にお話しを伺った。まずは水土里ネット森山／俳句詩岳同人で副理事長の塩川正さん。彼は、この会の立ち上げにも携わった、日盛会の父のような存在でもある。塩川さんは熱心に話した。

「この会をきっかけに、小諸を俳句のまちにしたいと思っています。俳句を通じて小諸がどんどん有名になってくれたら、嬉しいですね。毎年この時期を楽しみにしてくれる人がいてとてもありがたいです。さらに全国から様々な人々がお見えいただけるような、まちになってくれたら、という切実な願いのもとで、私たちは活動しています。」

また、塩川さん自身も、サポートするだけでなく俳句を詠んでこの会に参加している。インタビューする前も、終わった後も青いノートに熱心に書きこんでいる様子が見受けられた。三十年間これが日課になっているという。ノートの中身をのぞくと、ページの隅々まで俳句がびっしりとならんでいた。

「俳句を詠むには、よく見ることが大事だよ。たとえば、道を歩くときも道端の花を見たりして、小さなことまで目をむけて歩くよ。」池のカメやメダカをじっと見ていると、まるで「暑いよ」と話しかけてくるようである、と優しそうに話す塩川さん。塩川さんとお話をしていると、なんだかこころがほっこりした。

つづいて、教育委員会の工藤紀彦さん。「暑くて大変だよ」と笑い飛ばす工藤さんにつられて、私もついつい笑ってしまう。色黒で、ワイルドでかっこいい方だ。工藤さんは、今回の会について次のように語る。

「こうして学生の人たちがたくさん来てくださってありがたいよ。若い人のパワーをたくさんもらってとてもいい刺激になっている。」

また、「我々にとっては嬉しいけれど学生のみなさんから見たらどうなのか不安」というお話もされていたが、いやいや。私たち学生も全く同じ気持ちであります。（笹野）

小諸のお土産

小諸の町の中を歩くと、古い商屋の町並みや駅周辺には大手門や懐古園といった歴史のある建物が今でも残っている。そんな町並みを眺めながらゆっくりと歩き、喫茶店などでゆっくり句を考える。そんな吟行を楽しむ姿が町中を歩くとよく見られた。

この「こもろ・日盛俳句祭」には過去に参加したことのある方が非常に多く参加されている。そんな方々は当然小諸に来るのも初めてではない。そうなるとそれぞれに毎回買って帰りたくなるようなお気に入りのお土産があるのではないか。町中を歩く参加者にお話を聞きながらいくつかのお店を巡り、小諸名物のお土産を探すことにした。

朝の十時前にも関わらず、照りつける日差しの強さのせいか町の中を歩く人の姿はまばらだった。そこでまずは、駅周辺のお店に入って小諸のお土産について聞いてみた。長野のお土産ではなく、あくまで小諸のお土産というと難しいらしくなかなかこれというものが出てこない。それでも町を歩き、ほんまち町屋館で地元の白いもを使ったポタージュスープが小諸のお土産としては評判がいいというお話を聞いた。このスープについては駅前のお土産屋さんにも置かれていて、人気があるとのことだった。

そのお土産屋さんの向かいに和菓子屋の虎屋さんというお店がある。こちらは四代も続く老舗の和菓子屋さんで、句会参加者もお土産で買って帰る方が多いというお話だった。独自の商標登録もされている『藤村もなか』を店頭で食べさせていただくと、十勝の小豆を使用した餡子がぎっしりと詰まったもなかの甘みが口の中に広がった。四代目が考案されたそば粉が生地に入ったどら焼きと合わせて、お店の看板商品として小諸のお土産になっている。

句会の帰りに立ち寄ってみてはいかがでしょう？（和田）

ここで一句

静けさに　和太鼓ひびく　作業部屋

昼になると熱さに加え、静けさに包まれる会場。その会場の一角を作業部屋としている私たちも、いつの間にか黙々と作業をするようになる。そんな時どこからか音がした。それは、市役所で練習をしている和太鼓の音であった。リズミカルに刻まれる音が、心地よく耳に響き、そうして私たちの作業も進んで行った。（相原）